

## 詩篇115篇1-15節 「目に見えない主」

### 1A 御心のままの全能性 1-8

#### 1B 御名のみへの栄光 1-3

#### 2B 偶像の無能性 4-8

### 2A 信頼に伴う祝福 9-15

## 本文

私たちは聖書通読の学びで、詩編を読んでいます。神さまのタイミングで、私たちはこの時期に、「ハレル詩篇」と呼ばれるものを読むことができます。先週、113 篇まで読みましたが、113 篇から118 篇までがハレル詩篇と呼ばれています。これは、過越の祭り、五旬節、そして仮庵の祭りの時に読み、また歌う箇所です。イエス様が過越の食事を弟子たちとされてから、「賛美の歌を歌ってから、みなオリーブ山へ出かけて行った。(マタイ 26:30)」とあります。イエス様が、その賛美が詩篇 113 篇から 118 篇までの内容であることは、明らかです。ですから、イエス様が十字架の道に進まれる、そして三日目によみがえらえる、その出来事がこれらの詩篇に反映されています。今朝は 113 篇の一部を取り扱いますが、ここにもイエス様の十字架に向かう思いが反映されていると思います。あと二週間で、受難日と復活祭を迎えますが、イエス様の思いを探りながら、それを自分の思いともしていきたいと思います。

### 1A 御心のままの全能性 1-8

#### 1B 御名のみへの栄光 1-3

1 私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。

この詩篇は、目に見える神々、偶像を拝んでいる人々の中で、いかに目に見えない神であられる主をあがめていくことができるのかについて見ていくことができます。2 節から、国々がイスラエルの民に対して、「彼らの神々は、いったいどこにいるのか。」と馬鹿にして、あざける言葉が出てきます。そうです、彼らの信じている神は肉眼で認めることができない方です。彼らは神殿を建てました。けれども、その中には何ら像と呼べるべきものがありません。確かに燭台はあり、香壇はあり、そして契約の箱がありますが、それを拝んでいるわけではありません。目に見えないのに、どうして時間とエネルギーを費やして、その神に自分の身を捧げることができるのか、とあざけています。

けれども、逆に問い質すと、「では、あなたがたは、なぜ目に見える神々を拝むのですか？」ということになります。わざわざ人の手を煩わせて、金や銀、木や石で造ったものをこしらえて、それで自分の神と言わせなければいけないのか？ということになります。神は本来、自分を支えるべき、

自分を越えた存在であるべきです。自分の頼れる存在であり、神が守っても、自分が神を守る必要はないはずで。それでも、自分で造り、自分で管理し、自分で守らなければいけないものを、自分の神としているのです。しかし、やはり自分たちの神を造りたいと思うのですね。

それはなぜでしょうか？そもそも偶像を造る動機は何なのでしょう？それが 1 節に書いてあります。「私たちにではなく、主よ、私たちにではなく」と詩篇の著者は言っていますが、その逆「私たちの名に栄光が与えられるように」ということです。自分が高められるように生きる。自分の存在が認められるように生きる、ということです。永遠の神、創造主不在の世界では、どこに自分の拠り所を置けばよいか分からないので、自分自身を高めることを第一として生きなければいけません。

神ではなく自分自身を高めること、今は「自己実現」という言葉を使います。あるいは、「自己啓発」という言葉も使いますね。必死に、自分が取り組める何かを見つけて、それを達成することに命を注ぎます。自分で規律を作り、それに従って生きることが全てとなっています。自分が必死に生きなければいけない社会なのです。今は、自分は能力がある、自分は常識的に生きることができる、そういった人々の多くが目に見えない問題を抱えていることが多いです。けれども、大多数の人々は、自分自身に負い目や劣等感を持っているので、そうした人々をカリスマにして真似しようとしています。「カリスマ主婦」とかいうのは、その典型です。けれども、意外にそうした人々こそが問題がないどころか、問題が山積しているのです。

なぜなら、自分の力で、自分の知恵で生きていくこと、それ自体に無理があるからです。自分の生きている社会、自分の生きている世界は、自分で造っていません。自分が支配していません。どうやって、一日を自分の管理の中で生きることができるのでしょうか？いや、一瞬たりとも自分の命を保つことは自分の努力ではできません。聖書は、神が世界の全てを造られたことを教えています。その自然の中に、ご自分に似せた人を造られました。ですから、自分の意志ではなく、神の意志によって生きることこそが、最も生きていることを喜べる道なのです。

イエス様は私たちに、こう祈れと言われました。「マタイ 6:9-10 天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。」自分の意志ではなく、神の意志がこの地上で行われますようにと祈ります。自分の名ではなく神の御名に栄光が与えられるように、という祈りと同じです。神の願われていることがなるように、神の計画が実現するように、神の国が支配するように、自分ではなく神が高められるように祈るのです。

2 なぜ、国々は言うのか。「彼らの神は、いったいどこにいるのか。」と。3 私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行なわれる。

私たちの生きている社会は、いつもこの問いを、信仰を持つ者たちにしています。これは、私た

ちが単に目が見えない神をあがめているということだけでなく、「そんなことを信じていて、何の役に立つのか？」と尋ねているのです。目に見える神々を拜むことは、即効性があります。今、話しているのは、必ずしも仏像などの彫像のことを話しているわけではありません。その人が、「これがあるからこそ私には生き甲斐がある。」という、その拠り頼むものであればどんなものも、神になります。自分の持っている社会的地位かもしれません。財産かもしれません。自分の趣味かもしれません。お酒かもしれないし、女あるいは男かもしれません。これらのものは目に見えて、その結果もはっきりしています。自分が何かすれば、その通り動くことのできるものです。

しかし、神のために生きて、神の御心を求めて生きる生活は、目で見える形ではその結果が出ていないように見えます。他の人たちは、三キロ進んだのに、自分が信仰をもって動いたから、一キロしか進まなかったということもあります。むしろ信じないで生きた方が、楽ではないかと思うかもしれないのです。そうした思いが、「彼らの神は、いったいどこにいるのか。」という言葉にあるのです。

けれども私たちの主は、そのような方でした。ゲッセマネの園で祈られて、「マタイ 26:39 わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください。」ご自身の願いではなく、父なる神の御心のままになさってくださいと祈られました。しかし、結果、この方は十字架刑に処せられました。その時に、祭司長らが、「神の子ならば、キリストならば、十字架から降りて来い。救世主ならば、なぜ自分を救えないのか。」と嘲ったのです。つまりここにある、「おまえの神は、いったいどこにいるのか。」というあざけりを受けられたのです。

しかし、詩篇の著者は反論しています。まず、「私たちの神は、天におられ」と言っています。これは、すごく高い空の上に神がおられる、だから見えないのだ、という話をしているではありません。ネブカデネザルの側近で、呪法師らが言ったことがこれを説明しています。「ダニエル 2:11 肉なる者とその住まいを共にされない神々以外には、それを王の前に示すことのできる者はいません。」天におられる神というのは、目に見える世界の中に限定される神ではない、ということです。それらを超えたところにおられる神だということです。言い換えると、世界でどんなことがあっても、全くぶれることなく、揺るがされることのない神であるということです。天地が滅びようとも、一ミリたりとも、一ミクロンたりとも、影響を受けることのない方だということです。「102:26-27 これらのものは滅びるでしょう。しかし、あなたはながらえられます。すべてのものは衣のようにすり切れます。あなたが着物のように取り替えられると、それらは変わってしまいます。しかし、あなたは変わることがなく、あなたの年は尽きることはありません。」天地万物をまるで着物のように、着替えることのできる神です。

いかがでしょうか、私たちはこのような神を信じて生きています。ですから、クリスチャンはしばしば、「芯がある」という評価を受けますね。その信じていることには同意できないし、自分自身は信

じようとは思わないが、ぶれることのない価値観を持っていることを、羨ましいと感じるようです。「すぐ反発するけれども、どうしても気になる。」というような、心の渇きを呼び起こす何かを持っています。これを「地の塩」とイエス様は呼んでおられますね。それもそのはず、私たちは永遠に変わることのない、不動の方を信じているのですから。

そしてもう一つの信仰告白もすごいです。「その望むところをことごとく行なわれる。」という言葉です。神は全能であられて、そして主権を持っておられます。どんなに賢く、どんなに権力を持っている者が物事を変えようとしても、それらのことも用いて、神はご自分の望むところを行われます。ですから、すべてのことは神の御手の中にあります。それがたとえ、悪いことであっても、です。神は悪に対して無力な方ではありません。しかし、悪をもすっぽりとご自分の計画の中に取り入れて、それを善のために働かせ、ご自分の栄光の獲物としてしまいます。

その代表が、私たちの主イエスの十字架です。それは、人類が犯した最大の罪でした。人殺しならず、神殺しを行なったのですから。暗闇の力が支配した時でした。しかし、主はその死の力に打ち勝たれただけでなく、その十字架を永遠の救いの計画、全人類の罪に赦しを与えるための道としてくださったのです。したがって、私たちは心強いです。どんな悪いが起ころうと、私たちは神の善の中で憩うことができます。クリスチャンになれば、何か良いことが起こるから幸せなのではありません。悪いことが起こっても、それでも希望を失わず生きる強さがあるから幸せなのです。偶像の神々ならば、必死にその呪いを取り除くべく供養したりします。私たちは神の御手の中で、また希望の中でその災いを受けとめることができます。

## 2B 偶像の無能性 4-8

そして、著者は彼らの嘲りに対して反駁をします。

4 彼らの偶像は銀や金で、人の手のわざである。5 口があっても語れず、目があっても見えない。6 耳があっても聞こえず、鼻があってもかげない。7 手があってもさわれず、足があっても歩けない。のどがあっても声をたてることもできない。

私たちは、自分のやりたいことを生き方の中心に置けば、それは偶像を拝んでいることと同じです。当時の神々は、まさに人の欲望を表しているものでした。バアルというのは、カナン人の主神で力と知性を持っています。もし、人間の理性や学問を信じていれば、その人はバアルを拝んでいます。快樂の神にケモシュがいました。もし、娯楽や趣味が最高の価値であるならば、その人はケモシュを拝んでいます。性欲の神がアシュタロテですが、情欲に身をこがしていれば、その人はアシュタロテを拝んでいるのです。

そしてここでは、その偶像の正体を描いています。彼らの偶像を見てください、確かにその顔には目が付いています。耳もあります、口もあります。手もあります。けれども、その目が私たちを見

ることができるでしょうか？いいえ、私たちの祈りを聞くことができるでしょうか、いいえ、その耳は機能していません。私たちに語るることができるでしょうか、いいえ語るできません。足もありませんが、どうでしょう動けますか？いいえ、私たちが動かさないと動けません！

それでは、彼らの嘲る、目に見えない神はどうでしょうか？私たちの神は、語られる方です。聖書は初めから、終わりまで、神が御霊によって語ってくださる方であることを教えています。神はかなりおしゃべりな方です！これが面白くて、神の語られることを聞くのがわくわくして、それで私たち信仰者は生きていけると言ってもよいですね。神が、キリストを信じる者にご自分の霊を与えてくださり、神の御霊によって私たちの霊がその語られることを聞くことができるようになっています。

そして、神は私たちを見ておられます。「出エジプト記 3:7 わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見、追い使う者の前の彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている。」主は人には知られないことも、ご存知です。それを知って、私たちの叫びを聞き、また痛みを知っておられます。そして、神は私たちの祈りを聞かれます。「116:1-2 私は主を愛する。主は私の声、私の願いを聞いてくださるから。主は、私に耳を傾けられるので、私は生きるかぎり主を呼び求めよう。」そして、神は私たちのために動いてくださいます。私たちがどこにしようとも、その場に来て助けてくださいます。

8 これを造る者も、これに信頼する者もみな、これと同じである。

偶像を造ると、どうなるのかが書いてあります。私たちは自分の願うとおり、自分の欲望を満たすとおりに偶像を造ります。自分が支配できる神なので、自分より劣っています。そして、自分のしていることには、4-7 節でみたとおりに無感覚です。聞くこともしなければ、見ることもしなければ、語ることもしません。そして次に、それに信頼する、あるいは拜んでいくと、その神と同じ、つまり似た者になっていく現象が起こります。ですから、自分よりも劣った神を造り、そして自分がその神を拜むのでその劣った神よりも、さらに劣った者になります。

がんじがらめの、縛られた生き方になります。パウロは偶像礼拝者の生き方をこう説明しています。「エペソ 4:18-19 彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっています。」無知になり、心が鈍くなり、道徳的に無感覚になり、命から遠く離れています。

私たちの生きている世、まことの神を認めない世においては、自分が生きるためには確かに、神の代用物、すなわち偶像に拠り頼まないといけないようになっています。英語で偶像は、アイドルです。アイドルとそのファンを見れば、私たちはそこにある虚飾を見ることができます。自分のしたいことがあります、偶像あるいはアイドルは、その願望を満たすような姿をしています。自分も

そのように格好良くなりしたいと思います。自分の身なりも、話し方も、そのように真似します。けれども、アイドル自身は、実は自分自身もそれは作り上げた、架空の姿なのです。そのアイドルにとても、パフォーマンスと私生活との乖離で悩み、そして多くの人が不幸な道を選び取ります。それも知らず、ファンも同じようにいつまでも満たされず、自分ではない自分を生活の中で作り出そうとするのです。

今、分かり易くアイドルの例を挙げましたが、自己実現の世界で生きるならば、まさにそのようになります。私たちは、神に造られたように、そのありのままの姿で生きることが許されるのです。ところが、何か型にはめたものでなければ価値のない世界に住まなければいけません。「ローマ 12:2 この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」御心によって自分自身を変えることによって、初めて人は世における型にはめようとする圧力から自由にされるのです。

では私たちがもし、偶像ではなく、生けるまことの神をあがめていたら、どうなるのでしょうか？あるものを拝んでいたらそれに似たものになるのですから、私たちが主イエス・キリストをあがめ、礼拝していたら、主に似た者になるのです。これが礼拝の醍醐味です。「2コリント 3:18 私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」

## **2A 信頼に伴う祝福 9-15**

そこで著者は、主を信頼するように呼びかけます。

115:9 イスラエルよ。主に信頼せよ。この方こそ、彼らの助け、また盾である。115:10 アロンの家よ。主に信頼せよ。この方こそ、彼らの助け、また盾である。115:11 主を恐れる者たちよ。主に信頼せよ。この方こそ、彼らの助け、また盾である。

一般のイスラエル人に対して、そしてアロンの家系、すなわち祭司に対して、そして信仰の共同体全般に対して、「主を信頼せよ」と呼びかけています。目で見えるものに頼る者たち、自分のやりたいこと、自分の欲求を満たすことが第一となっているこの世において、私たちに必要なのは信仰です。目に見える所に従えば、それは愚かで、不都合で、損をします。だから、主を信頼するのです。そして畏れ敬います。畏れ敬うとは、たとえ自分の悟りや理解によれば、理屈に適わなくても、主が仰られるという理由だけで、その戒めを守り行うことを意味します。その中で、確かに危険があるでしょう。敵が攻撃します。しかし、主が助け、盾になってくださいます。

115:12 主はわれらを御心に留められた。主は祝福してくださる。イスラエルの家を祝福し、アロンの家を祝福し、115:13 主を恐れる者を祝福してくださる。小さな者も、大いなる者も。115:14 主

があなたがたをふやしてくださるように。あなたがたと、あなたがたの子孫とを。115:15 あなたがたが主によって祝福されるように。主は、天と地を造られた方である。

主を信頼することで、私たちはまことの祝福を受けることができます。それはこの世の与える報いとは異なるものですが、主はキリストにある祝福をもって私たちを豊かに祝福してくださいます。そして大事なものは、第一に、その祝福が増えるものであること。第二に、子孫が与えられるということです。これを言い換えると、私たちは御霊による実を数多く結ぶことができるということです。イエス様は、種が良い土地に落ちれば、三十倍、六十倍、そして百倍の実を結ぶと言われました。私たちが日毎に主の前に出ていく、そして集まって主を礼拝すること、これは地道な営みです。しかし、そうした主を恐れる生活は必ず、実を結ばせるのです。第二に、子孫が与えられるというのは、実が残るということです。実が結ばれるだけでなく、残るのです。

いかがでしょうか？私たちは、どちらの名を求めていますか？自分が認められる、自分が高められる、そうした自分の名に栄光が与えられる人生ですか？私たちは、目に見える得になることを求める誘惑を受けます。また、自分に不利益なことが起こるのではないかという試みを受けます。しかし、主を信頼してください。主が守ってくださいます。そして、その地道な生活は必ず、永久まで続く報いを受けます。